荒尾市観光振興計画策定等委員会関連記事

参考資料３

令和３年５月５日 有明新報

3.5.05 新報

マジャク小屋など提案

荒尾 観光振興計画へ 資源活用施策考える

荒尾市観光振興計画策定等委員会（山代秀徳委員長）の会議が4月23日、市役所で開かれた。出席した委員は観光振興計画（案）のコンセプトや具体的な取り組みについて意見を出し合い、荒尾の観光資源をどう生かすか施策を考えた。

同市では第3期観光振興計画を今年9月末までに策定する方針。委員会は学識経験者や観光産業関係者、市民などで構成されている。会議では市が第3期観光振興計画（仮称）のコンセプト（案）を示した。「ファミリー層や若者グループに人気のスポットや施設がある」「荒尾干潟という象徴的な資源があり、独自性のあるプログラム開発が進む」「マジャクや梨、お好み焼きなど荒尾ならではの食資源がある」などを市の強みとして挙げた。さらにコンセプト（案）として①興奮②癒し③感動④ARAOneツーリズムを提案。委員からは、コンセプトをさらに絞り、より明確にするよう求める意見などが出せた。

「誘客戦略を踏まえた具体的な取り組み」について委員が観光客側とサービス提供側に分かれての意見交換もあった。観光客側の委員から「カキ小屋はあるがマジャク小屋はない。とれたてのマジャクをすぐに食べることができるようにしては」という意見が出されると、「マジャク釣りは子ども連れがほぼ100%。すぐに食べられるのは魅力になる」や「アウトドアに関心がある人をターゲットに絞っては」など、それぞれアイデアを出し合った。（矢野 大輔）

荒尾の観光について意見を出し合う委員たち

令和３年６月９日 熊本日日新聞

炭都から観光都市へ

取材前線

樋口 琢郎（荒尾支局）

干潟に沈む夕日を眺める家族連れやカップル、野鳥を追うカメラマン、楽器を楽しむ人―。週末の荒尾干潟で見られるいつもの光景だ。沿岸には20台くらいの車がずらりと並んでいる。

干潟に隣接している荒尾干潟水鳥・湿地センターの中村安弘センター長(42)は、干潟の見物客は2年前と比べて「3倍ほど増えている」と話す。2012年にラムサール条約に登録されて以降、映画のロケやテレビ番組などで取り上げられる機会が増加。最近は新型コロナウイルス禍で「3密」を避ける人が増えていることも影響しているという。

確かに、雲仙まで見渡せる見晴らしの良さに加え、季節や天候、時間帯によって日々異なる風景は魅力的だ。爽快な景色に癒やされたい人は多いだろう。

ただ、私自身は2年前の赴任まで、このような場所があることを知らなかった。荒尾は炭鉱で栄えた街というイメージが強く、県内の他自治体と比べて観光地という印象は薄かった。だが、炭鉱閉山から20年以上の時がたち、炭都から観光都市に向けた動きが加速している。

干潮時に耕運機で沖合まで行って干潟の自然を楽しむ「テーラー体験」が昨年始まり、干潟の生物の豊かさを紹介する水鳥・湿地センターも19年に開館。どちらもアイデア豊かな市民や行政マンによって運営され、観光客から好評を得ている。

市は今後、再開発を進める荒尾競馬場跡地に道の駅を整備し、ホテルや温浴施設も誘致する青写真を描く。干潟に加え、小岱焼の窯元や世界文化遺産の万田坑などが観光地としてつながれば、滞在型の観光需要も見込めるとみている。

あまり知られていなかった豊かな自然や歴史、文化をどう観光に生かすのか。荒尾市が新たなページを刻もうとしている。

2021・6・9

令和３年８月13日 有明新報

観光客数250万人目指し

3.8.13 新報

魅力高め周遊促進図る

振興計画策定へ 干潟や食の資源活用を

荒尾市

観光振興計画の素案を話し合った会議

荒尾市観光振興計画策定等委員会の第3回会議が6日、市役所で開かれ、第3期荒尾市観光振興計画（仮称）の素案を審議した。2025年の目標総観光客数を250万人に設定。それに向け、魅力あるコンテンツづくりや効果的なプロモーション、周遊しやすい環境の整備と宿泊の推進などを進めていく。9月10日まで市のホームページで公開し、パブリックコメントを募集する。

市内の総観光客数は19年までは200万人前後で推移していたが、新型コロナウイルスの影響などで、20年は約125万人に減少している。第3期観光振興計画は21年度から25年度までの5年間。

素案では、市の強みとして、グリーンランドや梨園などファミリー層や若者グループに人気のスポットがあること、荒尾干潟という象徴的な資源があり、マジャク釣りやテーラー乗車体験など独自性のあるプログラムがあること、マジャクや梨、お好み焼きなど荒尾ならではの食資源があるなどを挙げた。

重点戦略としては、これらの強みを生かし、①グリーンランドなどを主軸とした周遊促進②リピーター（あらおファン）の拡大③高付加価値化による消費単価の増加を掲げ、夜の時間帯に楽しめるプログラムづくりや、梨、マジャク、メロンパンといった「荒尾グルメ」の魅力発信強化、荒尾干潟や小岱山、万田坑などの地域資源を活用した新たなプログラムの造成などに取り組んでいくとしている。

会議では出席した委員が「まずは魅力あるコンテンツがないと集客にはつながらない。計画の最初の4年間はコンテンツを磨き上げることに力を入れてみては」や「魅力アップの前に各団体の中で情報や思いを共有し、広げないと市民にも伝わらない」などの素案や荒尾の観光についての意見を挙げた。

今後、パブリックコメントの意見も踏まえ、9月に観光振興計画を策定する。

（矢野 大輔）

令和３年９月９日 熊本日日新聞

「観光都市・荒尾」へ積極投資

荒尾市が、観光客誘致に向けた様々な手だてを積極的に進めている。狙いは「観光都市」としての知名度向上。荒尾干潟や万田坑といった“全国区”のコンテンツPRに加え、新たにホテル誘致や道の駅開業も計画しており、観光客に市内の見どころを巡る周遊性を高めてもらう仕掛けを繰り出している。

最大の目的は、地域経済の活性化。経済循環に寄与する定住者増で、人口減少が毎年500人ほど続いている状況に歯止めをかけたい考えだ。荒尾商工会議所の産業振興専務理事は「観光業従業員は飲食や加工品など幅広い業種への波及効果が期待できる。地元に残る若者が増えることにもつながる」と話す。

市によると、新型コロナウイルス感染拡大前、2019年に市を訪れた観光客は198万人。2019年度は、2年前と比べて7割増の4800万円を予算化した。コロナ禍前は33万人だった11年から15年減少した。抜群の集客力を持つ遊園地グリーンランドには年間約100万人が訪れるが、それ以外の施設や名所をどう伸ばすかが鍵を握る。15年に世界遺産登録の万田坑は初年度に約10万人を集めたが、19年度は約4万人にまで落ち込んでいる。

現状のてこ入れのため、市は積極的に投資。21年度は、2年前と比べて7割増の4800万円を予算化した。コロナ禍後を見据えて、中国の旅行会社に向けた市内観光地の映像配信、楽しみ方を提案するプロモーション動画も制作した。

「効果はすぐに出ないだろうが、今のうちに種をまいておきたい」と市産業振興課。特に、ラムサール条約登録の荒尾干潟、万田坑という世界から集客できる二つの観光資源への期待は高く、「来客数はもっと伸ばせるはずだ」と自信をみせる。

コンテンツを生かす新事業も動き始めた。19年度に市内の観光客数を高める観光周遊路に選ばれ、21年度に本開業。ホテルや温泉施設の誘致計画も進める。市内唯一のナシやマジャク、小代焼などの魅力発信と組み合わせて、観光客の市内滞在時間の増加を狙う。

25年度の目標観光客数として、250万人を掲げる荒尾市。橋田敏彦市長は「観光周遊路の再開発が進めば、市周遊の拠点も増える。一分達成可能な数字だ。荒尾ファンをさらに増やすため、どんどん新規事業にチャレンジする」と意気込む。

（橋川泰郎）

干潟、万田坑、競馬場跡再開発…

周遊性アップ 活性化狙う

新導線「テーラー」を活用して干潟を探索する体験会。荒尾市は観光の目玉として売り出している＝同市

クローズアップ

には、荒尾干潟の豊かさを紹介する施設・湿地センターが開館。新導線に乗って干潟の自然を楽しむグリーンツーリズムも始めた。万田坑では今年5月、石炭運搬などで活躍した電機機関車「炭鉱電車」を乗車体験保存すること歩歩の保管庫も整備する方針だ。

さらに市は、地域を巡る観光周遊路に選ばれ、21年度に本開業。ホテルや温泉施設の誘致計画も進める。市内唯一のナシやマジャク、小代焼などの魅力発信と組み合わせて、観光客の市内滞在時間の増加を狙う。

25年度の目標観光客数として、250万人を掲げる荒尾市。橋田敏彦市長は「観光周遊路の再開発が進めば、市周遊の拠点も増える。一分達成可能な数字だ。荒尾ファンをさらに増やすため、どんどん新規事業にチャレンジする」と意気込む。

（橋川泰郎）